

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月18日現在

機関番号：34512
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21520300
 研究課題名（和文） 両大戦間期ロンドンにおけるレビューを中心としたウエストエンド商業演劇に関する研究
 研究課題名（英文） A Study of West End Theatre: English Revue in the Inter-War Years
 研究代表者
 赤井 朋子（AKAI TOMOKO）
 神戸薬科大学・薬学部・准教授
 研究者番号：70309433

研究成果の概要（和文）：イギリス、特にロンドンのウエストエンドにおける両大戦間期は、ミュージカルに先行する様々な音楽劇（オペレッタやミュージカル・コメディ、レビューなど）が共存する時代であったが、本研究においては、この中でも特に、歌、踊り、寸劇からなるレビューという表現形式をとりあげ、フランスやアメリカから移入されたレビューがどのようにイギリス独自のものに発展していったかについて、特にチャールズ・コクランとノエル・カワードによるレビューの上演資料を調査することにより明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The West End theatre in the era between the two great wars was rich in a variety of so-called 'illegitimate' plays such as musical comedies, revues, and other types of theatrical entertainments. This research project has made special focus on musical 'revue', one of the theatrical genres consisting of songs, dances, and sketches, and has shown how revues, originally imported from France and America, developed in uniquely English ways by examining archival materials regarding some important revue productions by Charles B. Cochran and Noël Coward.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：イギリス演劇、両大戦間期、レビュー

1. 研究開始当初の背景

(1) イギリスの両大戦間期は、商業演劇全盛の時代であったが故に、従来、演劇研究の対象になることが少なかった時代であるが、最近ではむしろ従来の研究が軽視してきた演劇（地方の演劇や女性作家の演劇、大衆演劇等）を積極的に拾い上げる傾向にある。例えば Baz Kershaw (ed.), *The Cambridge History of British Theatre, Vol. 3, since 1895* (Cambridge UP, 2004)は、その立場から編纂されたイギリス演劇史の研究書である。

また、ストレートプレイ(台詞劇)以外の、かつては「非正規劇」と呼ばれていた種類の演劇をより肯定的にとらえ直す Jane Moody, *Illegitimate Theatre in London, 1770-1840* (Cambridge UP, 2000)のような研究書が出版されていることからわかるように、近年、音楽やダンスを含むミュージカルのような演劇の研究の必要性が、両大戦間期のイギリスに限らず、指摘されるようになってきた。

本研究は、国内外のこのような研究動向と連動するものであった。

(2) 研究代表者は、本研究を開始する以前に、この時代のイギリスにおける演劇の検閲について調査・研究を行っていた。そして、どちらかと言えば、上演を「許可」されることの多かった商業演劇に目を向けて、ロンドン、ウエストエンドの演劇人達が検閲官とどのように折り合いをつけながら、上演の実現を果たしたかという観点から考察を試みていた。

その過程において、本研究テーマの着想につながる次の情報を得ることができた。

検閲する側（宮内長官）もされる側（ウエストエンドの興行主）もともに、表現における品位を保つことによりウエストエンドの演劇の大衆化を阻止しようとしていた面があったこと。また、ミュージック・ホールのような大衆芸能と異なり、レビューの場合は宮内長官の検閲を受けていたことから、大衆演劇とは異なるミドルブラウンな演劇へと変化していったのではないかと思われたこと。そして、検閲を受けていたおかげで、レビューの上演台本が今でも資料として残されていることが、上記の研究を行う過程で明らかとなり、本研究の着想につながる有益な情報となった。

研究代表者個人の学術的背景としては、以上のことが指摘できる。

2. 研究の目的

本研究課題は、イギリス、特にロンドンのウエストエンドにおいて両大戦間期に流行していたレビューについて、特に次の2点から研究することを目的とした。

(1) ミュージック・ホールなどの大衆演劇の影響を受けながらも、いかにそれとの差別化を経てウエストエンドの中産階級的なエンターテインメントに変質していったか。

(2) フランスやアメリカから移入されたものでありながら、いかにイギリス的な特徴を持つレビューに変化していったか。

具体的には、レビューを含む当時の音楽劇の発展に大きく貢献したプロデューサーのチャールズ・B・コ克蘭が、レビューの質的向上を目指して実際に行ったことや、それに対する当時の人々の反応や評価を調査すること。そして、そうすることにより、イギリス独自のレビューの特徴をいくらかでも明らかにすることを目的とした。

コ克蘭は、劇作家のノエル・カワードを起用して、*Private Lives* (1930年)や*Cavalcade* (1931年)などの代表作を何作か上演したことで知られる興行主であるが、本研究においては、そのカワードが1923年～32年の間に台本を書いて評判になった4つのレビューを中心に研究を行うことにした。

レビューは、プロット（物語の筋）を持たず、俳優のスター性や作品全体の雰囲気といったものに依存するタイプの演劇であるため、音楽劇の中でも特にその一過性や再演の困難さが指摘され、従来、研究の対象になることはきわめて少なかった。それだけに、当時上演されたレビューが実際にどのようなものであったのか、実証的にアプローチする研究は、とりわけ、ミュージカル研究の必要性が指摘される今日においては、有益な情報を提供できるものになると思われた。

3. 研究の方法

本研究課題の研究方法は、この時代のレビューに関する一次資料の収集と、収集した資料に基づく分析が中心となった。

具体的には、「2. 研究の目的」欄に記したノエル・カワードの4つのレビュー、つまり『こちらロンドン！ (London Calling!)』(1923年)、『ダンスを続けて (On with the Dance)』(1925年)、『この恵みの年に！ (This

Year of Grace!)』(1928年)、『言葉と音楽 (Words and Music)』(1932年))を中心に、その他の代表的なレビュー作品(チャールズ・コ克蘭が上演した主なレビュー)にも目を向けながら、上演関連の資料を収集した。

閲覧した資料は、上演台本(検閲台本)、上演プログラム、舞台写真、書簡類、新聞や雑誌に掲載された劇評や評論、コラム、特集記事、広告などで、主として、大英図書館、ヴィクトリア&アルバート・ミュージアムの分館、ニューズペーパー・ライブラリー(いずれもロンドン)において調査を行った。

また、それ以外にも、上演に関わった人たち(興行主、作家、俳優など)の自伝や回想録、当時の舞台を実際に鑑賞した人たちによる観劇記やエッセイなど、初演当時の舞台の様子を描写したり分析したりしていると思われる文献(主として古書)も収集した。

4. 研究成果

(1) 研究開始当初は、研究対象の時期を両大戦間期としていたが、調査・研究を進めるにつれて、1910年代(第一次大戦前の時期を含む)も重要な時期であることがわかり、結果として主に1910年代~20年代を中心に詳しく調査することになった。

第一次大戦以前の1910年代に関する資料を調査すると、アルハンブラやエンパイヤといったウエストエンドのミュージック・ホールにおいて「レビュー」と呼ばれるものが上演されていたことがわかるが、その当時の演劇専門雑誌や文芸雑誌の中からレビューの特集記事やレビュー論のエッセイ等を発見できたことは有意義であった。それらの資料を読むことにより、当時はまだ外国(フランスやアメリカ)のレビューを表面的に模倣しただけのものが大半を占めていたことや、レビューという言葉が見境なく何にでも使われていたこと等がわかり、外国のレビューを取り入れた際の混乱の様子が、手に取るように理解できたからである。

また、1910年代にチャールズ・コ克蘭が上演したレビューの上演台本(検閲台本)を調査してみたが、フランスのレビューをイギリスで上演することの困難さそのものを表現した自嘲的なレビューも上演されていたことがわかった。

(2) レビューは「対話」形式のスケッチ(寸劇)を含むジャンルであるが、そのことが「劇場法」に関連する厄介な問題を生じさせていたことが、本課題の研究を進めるうちに明らかになった。つまり、本来なら「劇場」においてのみ上演が許されていたある程度の長

さの「対話」劇をミュージック・ホールのような大衆的な寄席で上演し始めたことが問題だったのである。結局、「劇場」の検閲にしか関わっていなかった宮内長官がレビューを上演するミュージック・ホールの検閲にも関わるようになるなど、特に1910年代は、寄席と劇場の区別が曖昧になることもある時期であったようだ。このような劇場規制のありかたが、イギリス特有のレビューの形成を促した点を指摘できたことは本研究の一つの成果である。

(3) ノエル・カワードが台本を担当したレビューのうち、二つの作品、『こちらロンドン!』(1923年)と『ダンスを続けて』(1925年)の内容を、上演台本や劇評を参考にしながら、場面(ナンバー)毎に明らかにし、上演の様子がどのようなものであったのか、可能な範囲でその再構築を試みた。

また、当時の劇評家が上演作品中のどこに変化や新しさを見いだしていたか、具体的に拾い出すことにより、個々のレビュー作品のその当時の演劇界における位置づけを明らかにした。『こちらロンドン!』の場合は、多くの劇評がこのレビューとミュージック・ホールとの明白な違いを指摘しており、全体として上演されるレビューの質が上がってきているという評価が目立った。

『ダンスを続けて』の方は、国内外からすぐれたダンサーと様々な種類のダンス・ナンバーを豊富に集めたことを、多くの劇評家が高く評価しており、ダンスにおいて特徴のあるレビューであったことがわかった。また、イギリスの場合、レビューは当時、パレエにとってシェルターのような存在であったと言われるが、上演台本のト書きや劇評、舞台写真等を参考にしながら、ダンス・ナンバーの内容を具体的にいくらかでも明らかにできたのは有意義であった。

(4) イギリスのレビューの発展に大きく貢献したと言われる興行主のチャールズ・コ克蘭は、1918年に、古いタイプのミュージック・ホールであったロンドン・パヴィリオンを、より知的で洗練された観客向けの劇場に改築し、一連の代表的なレビューを上演し続けたが、コ克蘭はフランスから移入されたレビューをイギリスの観客にふさわしいものに変えることを目指して、この劇場で数々の革新的な試みを行った。本研究は、様々な資料を調査することにより、その一つ一つの具体的な例を示したが、そうすることにより、イギリス独自のレビューの一側面を明らかにすることができた。

調査を進めるにしたがって、開始当初の予定からはいくらか変更も生じたが、逆に開始

当初は予想していなかった収穫もあり、全体としてはそれなりに成果をあげることができた。本研究は専ら実証的な方法によるものであったが、それまで等閑に付されてきた分野について、新たな視点から具体的にいくつかの点を明らかにできたことは大きな成果であり、また、今後の演劇やミュージカル、ダンス等の研究にとっても示唆的なものになると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 赤井朋子、チャールズ・コ克蘭の『ダンスを続けて』—イギリス 1920年代のレビューに関する覚え書き、*Libra*、査読無、11、2011、75-99

② 赤井朋子、「寄席」のレビューから「劇場」のレビューへ—1910年代イギリス演劇の一側面、*劇 Drama*、査読無、46、2010、8-9

③ 赤井朋子、アンドレ・シャルロの『こちらロンドン』—イギリス 1920年代のレビューに関する覚え書き、*Libra*、査読無、10、2010、51-73

[学会発表] (計3件)

① 赤井朋子、両大戦間期ウェストエンドにおけるイギリスのレビューの成立、日本英文学会関西支部大会、2011年12月18日、関西大学・千里山キャンパス

② 赤井朋子、都市と演劇—ロンドンの場合、近現代演劇研究会、2009年10月17日、大阪大学・豊中キャンパス

③ Tomoko Akai, *The Lord Chamberlain and the Popular Playwright of the West End Theatre: How Noël Coward Reacted to Theatre Censorship*, Annual Conference IFTR/FIRT, Lisbon University, 15 Jul. 2009

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤井 朋子 (AKAI TOMOKO)

神戸薬科大学・薬学部・准教授

研究者番号：70309433